

氏名	松 本 剛 昌
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1831 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和62年 9 月30日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）
学 位 論 文 題 目	Role of Donor Specific Blood Transfusions in Prolongation of Kidney Graft Survival (ドナー特異的輸血の移植腎生着延長における役割)
論 文 審 査 委 員	教授 寺本 滋      教授 太田善介      教授 大森弘之

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

移植前輸血による移植腎生着延長効果は、広く認められているが、そのメカニズムに関しては、未だ明確な見解は得られていない。著者らは、Donor-specific blood transfusions (DST) 後に誘導される免疫調節因子の検討を行うと共に、これら免疫調節因子の誘導と腎移植後の急性拒絶反応発現率や生着率との関連性について検討した。

DSTは、ドナーの新鮮全血200 mlを 2 週間間隔で 3 回施行し、DST終了後 3 週目の患者末梢血リンパ球と血清を採取し、DST前の Mixed Lymphocyte Reaction (MLR) に対する抑制試験を行った。

その結果、DST後にMLR抑制性細胞や、抑制性因子が誘導されることが明らかとなった。すなわち、MLR抑制細胞は、OKT 8<sup>+</sup>細胞(Ts)であり、MLR抑制性因子は、レシピエントの responder cellに向けられ、ドナーアロ抗原に特異的で、その抑制活性は、Ig-G分画に存在し、抗イディオタイプ抗体(抗Id抗体)と考えられた。急性拒絶反応の発生は、Ts誘導例の 14.3 % (1 / 7)、Ts非誘導例の 75 % (6 / 8) に認めた。また、抗Id 抗体誘導例では 7.7 % (1 / 14)、非誘導例では 70 % (7 / 10) であり、一年生着率は、それぞれ 92.9 %、66.7 %であった。

以上の如く、DSTにより、抑制性T細胞や抗イディオタイプ抗体が誘導される症例では、これら免疫調節因子により、急性拒絶反応は有意に制禦され安定した移植腎生着が得られた。

なお、本論文は共著論文であり、共著者の協力を得て完成したものである。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は腎移植に関する臨床的研究であるが、移植前輸血により移植腎生着延長効果を得るとともに、そのメカニズムについて免疫調節因子の誘導と急性拒絶反応発現率や生着率との関連性について検討した結果、重要な知見を得たものであって価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。